

ほんとうにあった! ミステリースポット  
② 海から来る・赤いドレスの女



ミステリースポット……解説  
217

見えない道  
191

記憶きおく  
167

赤いドレスの女  
141

呼ぶ声よぶこゑ  
117



もくじ



桜さくら  
5

団地だんち  
25

海から来る  
45

パワースポットにご用心  
67

絹の道きぬのち  
91



さくら  
桜

東京都谷中<sup>れいえん</sup>霊園 ● 青山<sup>れいえん</sup>霊園 ● S<sup>ほうれいえん</sup>県某霊園



満開の桜が春の風景を明るく彩っている。ときどき、強い風が吹く。その度に、ちらちらとまるで踊っているように、花びらが地面に舞い降りた。

町は、華やいた服を着た親子連れで賑わっていた。「そうか、入学式があったんだ」

ミサキは四年前のある日の出来事を思い出した。

それはミサキが中学校に入学する日のことだった。

「ミサキの家はお母さん来ないの？」

入学式へ向かうミサキに、小学校がいつしよの友だちが声をかけた。友だちの隣にはその子の両親が揃って歩いてきた。

ミサキは少し先を歩く父親と二人で、入学式に向かっていた。

「うん。お母さんは弟の入学式に行ったんだ」

「そうか、ミサキは双子だったね」

「そう。弟は少し遠い学校へ入るから」

弟は学校も休みがちだったから、クラスメイトの記憶にもあまり残っていないのだろう。

「千早くんだけ。病弱だったみたいだけど、遠くの学校に入って、大丈夫なの？」

友だちのお母さんが心配そうに聞いた。

話しをしながら歩くうちに、先を歩く父と少し間があいてしまった。

ミサキは、早足で父の後を追った。

入学式には、本当は父だけでなく、大好きな祖母がいつしよに来るはずだったが、祖母は風邪から体調を崩して、今日も外出することはできなかった。

入学式は無事に終わった。

「ミサキ、申し訳ないけれど、一人で家に帰れるかな？」

父が困ったような顔でミサキに言った。そういえば式が終わって、携帯電話の電源を入れた途端に、父の顔色が変わった気がした。

「これからどうしても行かなくちゃいけない仕事が入った。家にはおばあちゃんもいるし」

祖母の具合も心配なのだろう。弟の学校は関西だ。お母さんが、大急ぎで戻って来